

桜蔭俳話会 十月句会 (第二十九回) 桜蔭会館

平成二十二年十月二十四日

- 3点①千代田区の千代田無番地小鳥来る 守 うめもどき熟れて墓城を明かるくす 友子
- 3点 傷ひとつ空に残さず稲光 守 ほろ酔ひの心にしみる秋の暮れ 溪水
- 埒も無きこと聞き流しぬくめ酒 幸 紅茶飲み紅葉を見る象の鼻 眞三
- 颯雲ネクタイ少し派手にして 溪水 啄みの残りの熟柿透きとほる ヤエ子
- 2点①長袖にしようかすまいかそぞろ寒 溪水 読み返す母の手記や終戦日 幸
- ①神隠しのやうに人消ゆ七原 貞勝 木漏れ日や去来の小さき秋の墓 貞勝
- ①鳥の声ひろがる鳥を引きてをり 秀一 路地奥の古き井戸なり小鳥来る 友子
- 2点 籠の鳥屈託もなしそぞろ寒 秀一 山荒れて猪町に人襲ふ 溪水
- 石畳行かず横道蕎麦処 幸
- 1点①夜具替て眠り安らく夜寒かな 溪水
- ①茨拔きのメモと柿来る良夜かな ヤエ子 不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝)
- 1点 結界の敷居またぎぬ竹の春 友子
- パンパスグラス穂は金色の婆娑羅振り 貞勝
- 美しく背筋伸ぶひと金木犀 ヤエ子
- 母頼る父の老いたり十三夜 友子
- すぐそこに声聞こへきし秋の薔薇 眞三
- 決断は集団離村吾亦紅 守

- ※ 冬近し山を降り来しけものたち 守
- 秋句帳アムール豹と睨み合ふ ヤエ子
- 朝寒やソファの猫の大欠伸 秀一
- 秋日和来るシートバスに手を振る子 眞三
- 赤とんぼ群るるやリフト夕照りに 貞勝
- 秋雲や北方領土オホーツク 幸
- 温めし豆乳匂ふ秋の雨 秀一
- 群れ太き真綿のやうな花ぞ 眞三
- 生徒らの声はり上げし赤い羽根 友子
- とめどなき黄落ひとの懐しく 秀一
- 稲雀慣れし暴走バイク音 守
- 旧友とばつたり出合ふ秋の橋 ヤエ子
- 見得を切る阿吽の子役里歌舞伎 幸
- 昼休み運動会する幼児かな 眞三
- 晩秋や点滴夜のシャンデリア 貞勝